

患者総合サポートセンター 登録医療機関をご紹介します

浅井皮膚科クリニック (保土ヶ谷区)

【診療科目】皮膚科

浅井皮膚科クリニックは、保土ヶ谷区の帷子(かたびら)町、JR横須賀線保土ヶ谷駅西口にある皮膚科専門のクリニックです。開院から23年が経ちました。赤ちゃんからお年寄りまでのすべての患者さんを対象として、皮膚、爪、髪の病気の治療や相談を行っています。中でも皮膚のアレルギーテスト、そして在宅や施設入所中のお年寄りの皮膚病治療に力を入れています。

4年前からは保土ヶ谷区の医師会会長を務め、新型コロナワクチンの集団接種や災害時の医療連携などの公務にも尽力しています。



診療時間	月	火	水	木	金	土
9:00~12:30	○	○	○	-	○	○
14:45~18:30	○	○	-	-	○	-

【休診日】木曜日、土曜日午後、日曜日、祝日

※土曜日は9時~14時(第3土曜日は9時~12時30分) ※平日14時45分~15時までは手術枠 ※水曜日午後は6月から臨時休診
〒240-0013 横浜市保土ヶ谷区帷子町1-14 TEL:045-334-3412 URL:http://www.asai-hifuka.com/index.html



PICK UP NEWS

国際医療支援室を設置しました [International Patient Support Desk] Starting from April, 2021.

4月1日より院内に国際医療支援室を設置しました。横浜市内の外国人人口は10万人を超え更なる増加が見込まれています。国際化社会を迎えた今日、日本に在住する外国の方々、日本を訪れる外国の方々を受け入れる医療機関の体制整備が求められています。当院では、2019年から外国人患者受入れ医療機関認証制度(JMIP)の取得を目指し院内体制整備を推進しています。現在、多様化する外国人患者さんが安心して訪れられる病院を目指して、ホームページ・院内表示の多言語化、自動翻訳機の活用、スタッフの“やさしい日本語”学習、外国人スタッフの採用などの取組を進めています。



国際医療支援室のヨンと申します。マレーシア出身です。日本語の他に英語、中国語、マレー語が話せます。外国人患者さんのサポート・ヒアリング、翻訳業務、国際化に向けた方針検討を担当しております。患者さん皆さんのお役に立てることに喜びを感じています。午前中は1階フロアにおりますので、お困りごとがありましたらお声掛けください。今後ともよろしくお願いたします。

横浜市立市民病院

診療受付

月曜日から金曜日

(土曜日、日曜日、祝日及び年末年始は休診)

- 初診の方 午前8:00~11:00 (診療開始8:45)
- 再診の方 午前7:30~11:00 (診療開始8:45)

※市民病院は原則、初診紹介制となっております。他の医療機関からの紹介状をお持ちください。

〒221-0855 横浜市神奈川区三ツ沢西町1-1 ☎045-316-4580 (代)



救命救急センターへの受入について

- 平日日中 原則、救急車で搬送された患者さんのみ受入れを行っています。
- 夜間・休日 必ずお電話にて連絡の上ご来院ください。

編集・発行:横浜市立市民病院 編集協力:モンタナセブンピクチャーズ 発行日:2021年7月 無断転載禁止

PARK HOSPITAL

安心と
つながりの拠点

YOKOHAMA MUNICIPAL
CITIZEN'S HOSPITAL

横浜市立市民病院 広報誌 [パークホスピタル]

2021

July

TAKE FREE

Vol. 32

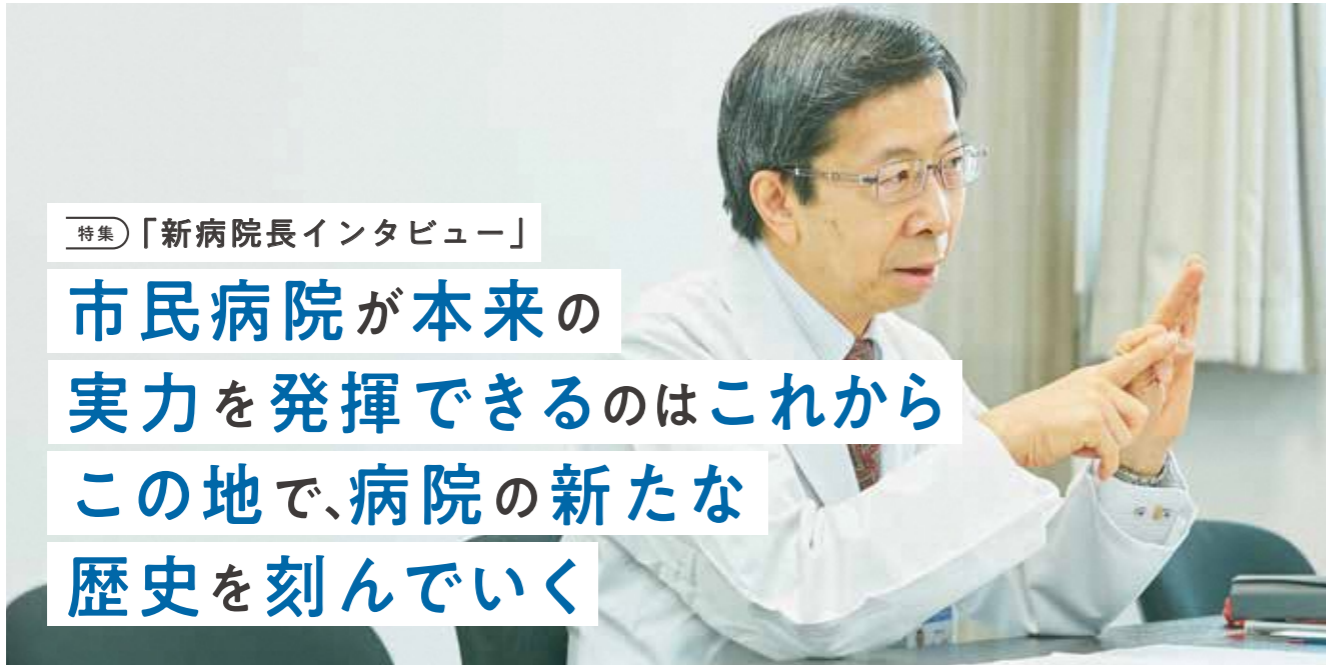


特集

横浜市立市民病院
新病院長インタビュー



横浜市立市民病院



特集 「新病院長インタビュー」

市民病院が本来の 実力を発揮できるのはこれから この地で、病院の新たな 歴史を刻んでいく

2021年4月、小松弘一先生が病院長に就任し、市民病院は新体制になりました。小松病院長に、これまでの歩みや当院での出来事、今後の抱負について話を聞きました。

01 消化器内科の臨床医から 1600人を束ねる立場に

本年4月に病院長に就任されて、
現在はどのような毎日を送っていますか？

当院で24年間消化器内科医として、またこの3月までは副病院長をつとめてきました。病院長に就任後も、週に2日は外来患者さんの診療を続けていますが、今の仕事の中心は病院のマネージメント。みんなの考えをまとめ、決断し、病院の方向付けをしていく管理者という立場です。今はまだプライベートな時間を楽しむ余裕はほとんどないですね。

02 命を助けたいという思いが 医師の道へと導いた

医師を目指すことになったきっかけを
教えてください。

父はサラリーマン、母は専業主婦の家庭で育ちました。子どもの頃はスポーツ少年で、親の影響でピアノを弾いたりもしていました。医療とは全く関係のない生活を送っていた私が医師を目指そうと思ったのは、1つは縁あって医学部のある大学の付属高校に行ったこと。もう1つは、親戚の中に若くして病気で亡くなった

方がいたことです。その方のことがずっと心に残っていて、人の命を助けたいという思いがだんだん強くなっていったんですね。科学が好きでしたから、もし医者にならなかつたら、科学者になっていたと思います。最終的には医学部を選んで、進学しました。



左：幼少期の
小松病院長
右：米留学時代

03 研究者としての8年間 その後、臨床の現場へ

医師になるために、どのような
勉強や研究をされたのでしょうか。

医師の3本柱は、臨床・教育・研究です。専門領域を消化器内科に定めて大学院に進学し、卒業後は米国に渡り、肝臓の移植に関わる研究に打ち込みました。しかし、2年目を過ぎる頃には、研究よりも臨床の現場に携わりたいという思いが強くなり、帰国して横浜市内の病院に就職しました。医師人生の大きなターニングポイントでした。32歳という臨床医としては遅いスタートだったので、戸惑うことも多かったです。それでも望ん

でいた臨床の場でやりがいを感じました。患者さんと向き合い、病気がよくなっていくのを見ることができると。それは今でも医師として一番嬉しいことですね。

04 新病院への移転は 最大の出来事

市民病院に勤務されて、
印象的だったことはありますか？

7年ほど勤務したのち、横浜州市市民病院に赴任しました。当時は消化器内科の医師は6人しかなくて、必死で働きました。以来、24年間を過ごしてきましたが、その中でも最大の出来事と言えるのが昨年5月の新病院への移転です。移転のタイミングでまさかの、新型コロナウイルスの流行です。患者搬送のリーダーとして、新型コロナウイルスに感染された方を含むすべての患者さんを、無事新しい病院へ送り届けることができました。新しい病院に来て1年になりますが、市民病院はまだ本来の実力を発揮できていません。その理由は、新型コロナウイルスです。この状況はまだしばらく続きそうですので、それを見極めつつ、私の任期中に安心してこの方向に向かっていくという方向性、ベクトルを作ることが、病院長としての最大のミッションだと思っています。

05 感染症対応と高度急性期医療 その2つの使命を果たしていく

今の市民病院に求められる役割は何でしょうか？

神奈川県唯一の第一種感染症指定病院、そして横浜市唯一の第二種感染症指定病院として、これまでに多くの新型コロナの患者さんを受け入れてきました。感染症病棟には専用エレベーターを設け、全室個室化した病室は、空気が外に漏れない陰圧室と呼ばれるつくりにするなど感染症対策の機能を充実させています。一方で、当院は高度急性期病院でもありますから、その



移転時の患者さん搬送の様子

役割も重要です。この1年は、新型コロナウイルス感染症対応に人員を投入しながらも、一般診療のレベルを決して下げることのないよう職員全員で取り組んできました。二兎を追うものは二兎を得なければならないということで、これからも病院としての2つの使命を確実に果たしていきたいですね。

06 みんなが“いい仕事”をして 市民に信頼される病院に

病院の職員に求めることは何ですか？

私は職員の皆さんに「いい仕事」をしてほしいと思っています。医師、看護師、技師、事務職、そして管理職、それぞれの立場で「いい仕事」とは何か、自分で考えて実践してほしい。「いい仕事」をするなんて当たり前のことをなぜと思われるかもしれません。でもこの当たり前のことがなかなかできていないのではないのでしょうか。

最後に、患者さんたちへのメッセージをお願いします。

私たちは、市民の方々が困ったときに頼りにしていただける病院でありたいと思っています。優秀な人材を配置し、最新の設備を整えていますので、ぜひ市民病院を信頼して、ご来院いただきたいと思います。



横浜州市市民病院病院長 小松弘一 こまつ・ひろかず

神奈川県出身。1982年慶應義塾大学医学部卒。1987年同大学院医学研究科修了。米国カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校などで研究に従事し、1997年横浜州市市民病院に入職。消化器内科部長、副病院長を経て2021年4月より現職。医学博士。専門は消化器内科。